石川先生第五篇

一

366
6

四つ免草子編

全十冊

皇都書林　清遠堂

さるほどに書き人くの為と俗の家を齊ふれあーえとめぐきるをあつめ四人童女のたんぎうんが為よ絵と入れあり一冊ゆくゆくたのべたるよ入まへ便りよ紀言年なり

門 吐9
帙 565
巻 6

道濃谷郷書序

大人乃心ハ甚猶空なれ共紀う
呼ハ則こゝ〳〵呼きれい刑やこ子
呼弟呼毛毛毛きこゝ〳〵て
而〳〵其體常ハ虚也今
格弘男ハ人乃称何ハ答ゑ

其人ハ庵ニして横説竪説諄々
誨導して而して虚ふ
志を未嘗て一物を有せざる
なりしかども門人何某を嘗る
人ハ蓋し人間言十餘條抜出
して梓ハ上せり題して
原氏ハ海ハいふ可理能きん
を得るものと其序とふ
及んで其編ハ名付ける人
と書してり作る是ハ
なるべし

文政元寅のとし冬十月

平安 上の家 [illegible]

道の額巻之上

○問人間のよる果報といふ事にて
まゝこ何とそうく見て保中ゐさや
答人なるの善さ果報也いふハ第一ふハ富貴
第二ふハ長寿第三ふハ学問第四ふハ安
産第五にハ子孫第六ふハ安心敬
愛し第一ふ富とハあるとうを侯大
臣まゝくハ長者となるとうふ様ばさ人の

另分お庭に事を為て不自由なく人
ふも儀しあ惜るく事なきといふ物を第
二に長寿とハ況しも九十歳百歳乃寿ハ
保ふもか我らハ大抵六十と過く浴るハ先ハ
長寿なるべし貴ふ三ハ著名とハ是又ふ
名と未代ハ面ふ限ふぬ人ハ吾ふ人
賢ふ人ハいふ著名を得るなり第
四ハ無病とハ種くの雑病に苦ぬといふ事
第五ハ子孫乃善ハとハ也も況しも親に

亀宗のごとく善子孝子ハ世ぬ
実録ふて父母ハ命と背ぬ紙ハ業
試相續するといふ物ハ六ふ安ふとハ種
ふ其雑に生ぬ事にして心痛の
事なきといふなり六ふ揉たるハ其ふ吾
果報乃人ハ多ふ但し六ふ蠱く揉事ハ幕
なり中ふ四ふもあるべ先ハ吾ふ果報乃
人ハ望ふ成まじ裏ふく拙事を為
ふ自由にしふあるハ借付ふ逃を成

先祖より持伝への家を離れ妻子を離れ
るゝ物さい奥様より中年にて病身腎
虚まさい多く此病にて死する人は短命
なる人は悪まれ指〻矢を放いはゞ〻どうと
いうを泥塗あるうんどいうるく人悪名や
移〻乃雑病にあひ一生くるしを不自生
する人病身なる孫にうひを悪堂又は
胴孫ものゝ〻敵名れ績娘〻娘みん
〻を家隨法ものゝ〻屢所身垂てを

まひのごとく〻るる孫乃頑悪ものゝ一生
穏〻乃心配えば常にんと悩すは若悩
ものうしいつう場ひるる悪果多たとひ
皆〻指ぶとを二つあるえは果報拙
人物をて此吉果を拾る人〻人〻るる
あまどを天上の楽多又この悪果よ色
人〻地獄へ落る人〻ふ里伝物しくこの
若果と保んとるるべえ来人百生此始
天家と交らに原ある年ものるいう

陰さあらまほしかるべき者は一生富貴貧賤
落ちぶれ者は貧困飢餓夭殤の苦しみは一世
の事に陰さうれハ格くの艱難にあへる
ほどもなく又出生ハ後身善悪出生ハ心の性
ゆゑ貧困飢餓ハ前世の因縁と思へ
く苦難とハ思ふ事もあるべしまこと身持教悔
ふ為あしきふるまひて富貴出世の果報を
ぬらく因縁短命なるもあるべしされハ
善果報持に成あるを先世父母の

墓を築しとひ帰ひとを捨てとけば
裏激ふるとふ事いふべしとハ信ずるにく
実り遠ひぬ事なるを先祖の根本る
孫ハ枝葉なるを根本枝葉ハ裏ふ
況や人間前世存生なるを父母を捨てとや
ふまでも蘇来にとふんあるべき報恩ずる
事ニハ神仏を尊敬すべしみにくも石敬無
礼のあるべき冥罰無事なるハ神仏世の
生賢なる者ハ神仏とあがめひ又先祖

父母を罰もうこと事とそんじて是を沒に果
就落くなる事を知らず陰おの来たるとどこたぐ
偶然出来たるもとひ已の過ちを招る禍こと
事と知ず是孔子の曰ひ積善之家有餘
慶積不善之家有餘殃とのふ事とさぐ
ういの意にもたなて事と実知せざるが故く
老実じごろ理徒言とふものと無しく
精くくやうの道理をおこう間敷のそなはれ法
もてさるべくに貴賤夫婦一家和睦

の求よ和るまくをれ貧人のうべうべき
曰ふ町内漁家に生れ貧生ふに和を大切につと
おもふ実力貧べうしぐ貴ふよ町内まを人下女
小者ふう出入の者ふよ和ることをめをうく
教あうく情深うるべく貴ふよ衣業と生精く
おもと怠り力貧べうしぐ貴七に奢と飽り使物と
ちうを要粗無と用べうぐ貴八よ酒高
拒興よ酒を大酒絶食すべうぐ色狂徒の
法傷有ふ勿論の事く貴九よ経業仕積

云礼云慢等は各畫かといまゝむべし是あの
過あるとバ如何と問ふ指をゞつ云ふ狂言清云先ん
入の云ふまゝ潜合中し」も嘘を云ぐ云ふ云ふ
指よ如りこゝ此とバ云ふと貝頭有へ千ら云ふ云ふ
斗ゝり世とこの人皆歌ふ如く此と云ふに猫文く
こゝを獨文云ふ猫の男とつふ云ふ云ふ人ハ猫と
云ふ云ぬふまを絵人せん精まて云ふのゝ云ふ
絵人に云ふ嘘くハいふ云ぐ男云ふ人ふまを男
の云ふのふ此ず絵ふの清猫清猫男云ふ云ふ

云ふふ男十小云ふ来我男めさん見文ハ見ん一
云の云ふ男ふて い男ハ絵ぐこと云ふまハ傷云う
又ハ仏乃と信じ云ぐい云と一生の仕事とし
嘘云して物云の人ふ和べし扱めて十箇絵と
情ん云おまず云ぐ能令運命拙く生れ人ふ
云ふこと云ふ無乃果報ハ絵べし云ふまこ世情く
云ふんバ運命絵を人云ふこと和文の間云ハ
云ふぐ云ぐ果報と云ふ云ふ絵云ふ云ふ度云
○同じ人ふ堯帝のめぐ聖人云ふ繁討論

酒のめると悪人と又は悪強乃人と後悔の人
あり別強なる人と柔弱なる人と見わけなくてはそ
れ見て取捨新製の薬方を強て薬を飲ん
ぜんと製するに数十遍する中に自然にぬるぶ
強出来る事一度くに我まゝ強て今再びこの
薬を製せんとすると中〻乃まこと程の出来ま
これ見て人竟舞のあしく又一向乃味にて苦ひやう
辛く悪しく悪臭やう食に堪ぬる事を見届付
酒飲のあしく人中出来の人い後悔者ハ下ふの

出来い悪味の薬を味ひの農い別強の人ハ
味ひの薄き柔弱の人乃ハ又一向乃安本丹ハ
出来ぬ様ひにて作悔者ハ乃ても不
出来の者ハ乃ぬるべ砂糖をんどかへて製し
ぬるせべ少しい味ひをるべ一もぶ
人を見質乃偏あるい見ぬ改むべ下悪
を中人と砂中人へ知あるべし
又問砂ほど仙い取ぬせバ〻〻ハ有るべ
どもせ見付しこと
質人ハ有るべ人の薬

菓子と毒てく水精と加人堪と清り盛べうしぶ茶の
又言出類ひ一毎ハ十人たり拙きでとも未知ぐる
不ものを丈人のムハ動めるるをれ知く心変ずる時ハ
言葉と又信用く変ぜるとをわど奥様の人も富
きにうるとバそう人相自ら易らふ減の人を学ぐく
徳と成就すもバ親ものこ若臭同付を自拙に者
の人に比べさもバ人相家の伝よ意情の人ハ筋関
ゆるまを致情の人ハ筋関よくまるるものとハを
されば致する時意慢義礼の事自ら凝集して

別能も化のづうう健に拙事も自ら後悔雑
事ハを絶深さ細の変事に至てハ高ふ勢
顧をび心事を清明よ与りて絶利害失
と無ど用も自ら明うよ耳を自ら聞く知を
自ら惜うるぬ精神清明義書ゐる時ハ事
も自ら全く果敢の威毎ばるべ
見一心にちて事賞人の変化ゆるん是人致
の中に於て生賞和後の悪ハく少義意とん
意く生賞人義意の善ハ毒和後とん意く聰

明の者い大家と成めり豊其乃者ハ明家と家
なく気塩とかく砂糖と清の紙うべし碗べし
一種乃酒まどと見と酒てハ醋とも成又苦と
なるべし一心のんなよく一種の紙煙草とも成
苦とも成苦とまとまとも成ゆ実ハ軽べうべ
気教のこべうべるゆ気んと清ゆ家煙と家紀
する事ハ多く教の一家に固べし改ま教するとハ
又自重の所行なそ割乗後紙こと紙しこと制
すべし教の一家ゆうせふすべうべれ物

○向人々廉草粗忽多くて又ハ拙事とする人
家煙乃性ハしゆ
苦本ゆう家煙の性ゆう強きとも又ま世所
行を拙事無茶粗忽乃多くハ家紙
せさ家よりわを拙事ハ家ハ固家のせくと又
心の拙ハ地紙ひく躁く落ぎるにはまりされば
常に家を粗うすんと落ぎて固前所向ふる
事に命と入ぎゆうべし二つの疾おるうべし
気又家煙と変化するの術物を思気物教

あんの法よてんを法るの行業と但嘉れ拙ち
乃害まねうるのとうるず實よ速よるの法也
愚老初めより常に病をゆへよあんの初まと
害ずるばやうく此ひにんづをと濃り
晩れ仏身をを法一筆下さるべくく

○問人毎よ癖あるものをうを事ばたをふを心法
ぎるる人をを事のおくく各人あをめるく優るる人
あるをいうちて忙を人を行横おり結擁仁
事のせまる人をを事ばぬ人を丁寧あるを

たづくく考あるを下戸あるを上戸あるこれらの
癖いうんして出すべきやいうを
昔者西門豹と云人ある人ハ動く性急ぶる人ある
云人考小韋と称よ性緩ぶる人ある
云人ハ性緩ぶる人ゆへ腰に弓の弦を佩て瓶
とすを云へを故小二人るに過ぎず又賞誉と
性云人考法ずを穏明ぶるを七ハ拙をんるを色
ぬ動ずに戒ん和の考を考ハ拙ふんを行る拙ふ
んを事の弱を考ハ拙ふ頑ぬやうに法考ハ

海きにてもぬ物よせてつくへきもの人つ我家
賛と称く知りて癖とかしく思ふくもしー
度ものくさりて腐ぬ人の大なる者物をも
どもせよ大きさもてくゆ遠ち美さきものこか物の人
を陸分量とふく持てう又手れかき人を
更まくまきもあまもごとも餘て蕃なりて見
べ、と重張を見ひぐるに出て又大ひよ害あふ
事あるを物の人い見べきを所てハ陸分量西
ぐ見ゆべし優なる人陸分量とうくく事に

海ぬ所にし暴露ものく事と仕度せぬ
所う物量と物積ものハ中ちたひなる癖と
戒てを戒先情てを情しべー見分と害し亂
と立すの北なりを知くを情むべー法擬伝
又薬弱に流ぬ所うそ又物量と法擬ものく
附食と薬と改めぬ遠よ家と立す人あるを
古人を優薬の者に仕事の使にて決
物ものの人立下と考ふに所ものとへまもしや
新ものさわで法擬も害ものやに見べー量の

巳る人ハ毛と吹くく病と称める人とと病めるとと
若うと老人水至清無魚人至察無友とつくり
見又小智の人のまうまハ多くハ人のこのまとと
知新みく我こそ物知ふして人と見侮うと思
へるか様に思ひたる人ハ大さふ迷惑するとなり
学戒べき事と又事の分ぬ人ハ陸ふ世間乃人の
仕業とを本ふして事を分ふべし自隨落ハ
事より直うぬ事と成もべしされど又下賤
たること事によりて害ふ下賤と棄てこと紀対ふと

必ず丁寧と言ふ事ふ出ふべうぶ出ふ
ふやうにすべし下戸ハ分海漂ふ様ふ
戸ハ夫ふ成ふ成ふべふ
家言ふ物ふ物ふ又親切ハ
仕直ふく成て人ふ心ふ新ふ事あふ
して実ふ小ふ人ふ偽ふ人ふ国海ふ
ふ世乃慶ふ孔ふ人ふ
事ふ知ふ事ふ知ふ
ふ成べし一ふ人ふ自吟味ふ

これを後むべし爲よすべうもなく悪老ぬさい丁寧に
ものくるゝと事あるうとゝへば又自隨分にくゝ悪
事あるも性急にくゝ害あるうと思へば又物成
拾ひ出事あるとゝ拾ひにこゝの事もあまどもまくこ
むくゝ病獲るゝ事は分ぬ癖にわ推と巴
事のあくて各ハ事なるも又世帯指にとりさま
あくまと存ず我慢ハ戒しもども止ずくゝ徒酒ハ
嫌なもバ酒の過ちに付合悪く人和
なくゝ悪くゝ仕合ずくゝ後んと分て

おしげくなるとゝ思ひたるよりなる事
○向世ハ面白て爲ぬ物なくゝ養の無門塾
徹人の仕事又ハ重銀乃無為公事訴訟の入決
考ハ面白まくゝ初ぶるゝ事なくゝ人の事なる
なる人を物をとゝも自分ハ先生と拾ひ絶ず塾に
裏激遍塞に乃ぶ人を又問くゝ悪敵して何
なくゝと人よ問くゝ事なるとゝ知と沙汰に
無業を事ハ極の身間為さるのこいうる教にや
昔晋齋極公郎のふに約考ふの考よ問くゝ

を須そびたる郭の美いいうる人稲をるもーや
言て回音とぬんぐ悪と悪ひ人稲にくいひ一極云
回結くぶ見名者く何てそびうや回音と好ども
若人と挙用る事結ぶ悪と悪めども悪人宜
過るの結ぶ見とるくそう極云大ひよ悪と悪ひ
子遠ふよ悪人と過者賢人と挙ひくと
をうされど世よ法ふ知くもかしも得をぬ人ある
又い法ふ知ひどと一つ中でまっと大事に約二つ
さけばまと一つと悪び約ひ人を中とび知ること得る

ぬ人ハ行ひど知くも一つも知ざるふおのど
まと一つ中ばハ一つ約ひ二つ中ハ二つ約ひ人ハまう
ざれども知る人ひおのど仕知とども拾をび
して裏激する人ハ知あるやうなどる悪人
悪人ひまと又まうざどども結人ひ回ひく
行ひ人ハ悪ひやうなどども実ハ知ぬるも
又回知る悪ひまでう知とたのまて意慢る拾ふ
善人悪なる人ハ教ひまて大事におゆふ
ゆくり第るにあるぞや

又言ふ所の理はもとあるべき物なれども
精く論ずれば人の知の二つなる仕方智はもと
なるべきもの事の出来は人を彼其微なる人
見聞を見ハ性高尚の利口と称んで知とその
知と為を情心の業家なる人と蓋知者く
行ふ人ともつべし又悪魔なるものと深く意て
固もる人を見ハ必事と海し家と興す人なり
是知ハ落して行原なる人ともつべしまバ人乃
其智の揚たるハ深く意に見ず只設んでもる

人ともこの乃間若しくべし世事世とのの事上
指弁ハ慢に情義を以て家國天下乃政事
武を示に為ともるもの為ものを見ものく設乃一家
のの切なるものと知べし是事家務にれりひ
あらもん人ハ深者て事賞と意しもの
でさるを
○問家齊といふ人事にしや
言ものと解るとハ即ち方と稽るの方法
稽るとハ耶ものと微よ事もまん系

而し事をこの方を備へあと斎べしこれバ徳意の
心のかよ方より備方斎ハ治国平天下の法あり
事ふし物ふかと源く心法より見ひざる人ハし
味をと知ず備方ハ唯方の約束と備るをこひ
斎家治国平天下ハ但人と治る事とをこう
不気身を家をもも天下を皆一心の中のこと紀
に関る事と又学バ心ハ此のめし備方斎ハ治国
平天下ハ燈の光のめし此のめし備方斎ハ治国
而よく心ハ此のこと百事おのづとこの人ハ

学問乃要ハ初学より終小ものと唯一心と此
ふするにあるを能く此ものこと備なぐ
初学ハ初学より初学ハ治よ教ごとを似ら
此人ハ人ハ是二義ハ下まて斎ハのん治ものん
家と齊るの要ハ夫婦和合とをすべし夫婦
ぞふん合ハ能ハむつうこのること此ものも
牛ハ馬ハ美夫婦心合ずんバ能ハ此つうこと事
なくてこと家治ものこと
せ夫ひ妻ものこせ妻ものこと家和見ずして後ハ

ごとくびし孝成ごとく釈子嫁姑乃ふふ云孝ば
んと腐まし心る事のこ云の一此とふ云あ孝ぎ
る夫婦ん合て俱くんと合きて又母の事とと
んを仕ぎく事へばし孝成就して釈子嫁姑のあつご
ん孝く聴して家治るべしたとひ頑なる又母ともう
夫婦たふん合ごめ母捨ん事の云やう育て又母
のん孝ものべし又夫兄弟孝ばてよ世話ちく
思ごと妻初ん孝して法ばさとびし友和ち成ごし
此と以ち家治ち兄嫁弟嫁なんどの

ひ孝ず孝よい破勢の事と成べしある又家夫と
ん孝を合して孝結せば万事孝ものる和睦
して家治らべし又夫我子と吾ふたまち育孝
嫁よ夫ら勢吾所よ法事賛素実仲ふて孝
業よ孝うぬ面う育成ども妻成い孝ん者
にく花嫁よ育ち慢に孝ま拵孝に孝せ勢
孝山よ孝せたごいろ時へいる聖良孝よ成て孝
ばごく孝ん孝夫と合きて孝に孝まうびく
六うち生貧成ども大孝へよく生まべしある又

夫婦心と合を力とあてもるの生質愚して
及ざる時は上に下令るべし又夫婦間の上下
女下男まさに出入の差ありて夫婦ぐんと付情とかけ
く懐安ぜんと心どもを家私見にして情と知
或る行積つゝ家法氣徳をもべしさり家雅
者を人育じ出入ぜん出嫁とゝぶ嫁裏べしあ
まく家夫と心と合をて家統付べ行を和合し
如生ゆく勤べし夫婦妻と共生像物統勤め
家業と出精しあと興きんと思へども家私ん

小して後ぶ訳を夜昼と更まるを好を
接心と嘗まく取縁なく自蔭ゆるべ夫愛
けよゝふとも世事成ぐゝ殿べ湯と沸し
くゝ不するかめし見家夫乃稲ゆと破ら
出世乃道と折絶ゆい自ゆも夫とゝ不備
金小遠も遍塞ゆる世ゆ不多ゆまく
家ん心と合ゝく俱掛せべいゆるかを興べし
元来婦人ハ僧上の心淫ゝものゝ家事勉
上宜それべ生それと母ゝ人ゝ新ん心ある

その方夫婦へ夫乃ふ後ひ方とさげく
偶よ動事ハ行ものゝ事ハ此所ハ
結く合点すべき事ハ夫る者又ハ兄ふの
人情を知く者に事べし兄とハく知ぬ
と商ふるの中ハ夫にく事夫と聞く弟と商
ものい事ハ事をさわぐ夫婦ハ人ハ百事
面うまべし易ふ小田二人同心其利断金同
心之言其臭如蘭と云ふ言ハ二人ハ成
合をくすもバ流事ハ金換と成るの

言の香ふ事ハ蘭麝のゝ如しと云ふ他人と他人
とハ同ふしてだふ此ハ法や夫婦ハと合ん
に相くとやちまバ一方のまふる者ハ我ハ陰よりふ
ふ乃情ハ先ん事あのんと張ふべし事あのんと
相すふふ先自分の方ハと堅すべし妄狂
茶屋ひ下女に戯事のゝ固相ふべし此方ハ
嘲ふまバ事のんハ女ハ相又方分ハ事の
事ハ事の生乃無ふ事べし此ふまバ
事のんを弱する他人事ハ夫乃ハ相ふ

妻たるものの面くれんぼうぬけぬこと丈と思
ひてこそ但分上のお無ハ丈斗知て妻ハ知
ぬものなり妻ハ丈の積ひよりて金銀とをて
出面の出入と知ぬ共なるまゝ今生の性面いろ〳〵の
損失きやうハいろ〳〵ぬ共なるまゝ
別上のお無ふれ無ハ丈ハ問て知べしてし
二箇条の約束出来て妻のんを納せばわふ鍋
湯よ沸まて妻あとを乗れ恐摩にして后根代
知ものを為べし丈傷石仏石の教へ行ものを

とも因ちうむ面うにもこと事くん丈乃
ふい傷石仏石の御法にあらざれば安心為后
成べし記あるべあきらむべきまゝ扨丈一人の
道すこにてくハ中むべこと共ふ法ふ后友ふ
丈丈せ后所ふ後ちひべし仏共の上ふくも
ちこと知識なきた見へきむふ最為ありふ
ふくも邪ある知識ふいを分きひべし決し用
利益なるもの共倚ふ偏見出来ぬまゝこと
又ちこ明ふ言ふこと人のふい板易ふ此て

篇ものゝ付合ハ心奥ゆゑ貴者ゆ
附合ハ心鄙ゆゑ人事をつゝしみ心掛るには
さゞ明らかなる又佛乃者ゆ付合ハ自然ゆ心淫
わるゝ篇実者ゆ付合ハ自然ゆ老成する者ゆ
別して婦人ハ心極易き者ゆゑハ附合不成
情むべし但し心淫ハ妻を厚ふ信ぜゝ家内
子供ハ自然ゆ奮乃者ゆ父母ゆゝも吾人ゆ
京ゆ上ゆふ命ゆ仕ひ度ものゝ為ハ人ゆ心和
ゆ家齊ふべし俗ゆの機の根本ハ主人の心一

身ハ先ふ人ゆ家と齊ふるゆハ唯己の心誠
研ゆんしと心ゆべし推ゆ他人ゆ同と作るゆ
○問ふ或ハ親兄九ゆ居る人道と如何なる
して世ゆ併の対ゆ下に居る時の者ハ乃ゆ
志ありゆ学んとゆ人ゆ子ハ親ゆ孝ゆ
ゆゝ者ハ良所ありて陸易成ゆ人ゆ
ゆゝ者ハ浮華ありゆん事と存ゆゆ
いゆゝ心ゆゝ可ゆん
答ゆ心学ハ人ゆと情ゆん治ゆの道ゆゝ

人我の念を動かす利のうひと排ひ仏と云者は
悔し取捨ぶる情と為らば若又と設ひ兄弟親
親朋朋朝友達に信実と厚く交を結ぶ人は
義を解みもとと云ずば吾事は人はのげを
忘れ事は無為に「史為始吾根と先として
同下と情を人の苦労は易く低まと人を見れば
といひて議論と論ず其人と翔ぶ者ば
若父を明学もんぶと嫌ひ西と西人ハ為る
べきなる人柄は感ん一皆乃ん人事と

おもひ思べし拙ふ人うの心学者は笑くに然
次實まとを情むんの落く拙知を奥は感義論
をぬんぐ人は言勝事と楽く計程の見識と
排ぶふ振舞し言慢の心前は十信し拙も紛
吟ハんぐ学せるの義と指して易たるは事書く
紛積事徒ありとも考ばハ人も論ずさうれと
更も考し次此十とも人の厭嫌ふも理ありと知
べし元来人情ハ我ふ拙むるしハ拙とバ学
問なる人の義まく書拙と云論ぶまさハ偽

なるに寧固べよりも愽奥くこゝろ積んもの来る
ものを鄙くこゝろ藝淫猥こゝろ味線すごとこゝろめば
胸常小知と者又よりも切なるこゝろ切なるこゝろすめども其四はの
孫白猫を悪まるゝ事淫猥こゝろ味線こゝろ其
害甚しきもバ学問となす者いしこゝろ雑合点
して偽りを向上の論と明らかに学者奥すべし決定
初よりこゝろ必ずこゝろ行ひてもこゝろ者又
明常に淫猥なるこゝろ是おこゝろたゞ猫を
んの中にこゝろ絶りすべしこゝろ道いこゝろ邪

但こゝろ境常に意ばる中こゝろ論語こゝろ君子思不
出其位とのみ中庸に君子素其位而行不願
其外といへこゝろバ学問の出来の時こゝろ出来ぬ
こゝろいせ然なり是学問の骨髄こゝろ不審素富
貴而行富貴素貧賤而行貧賤素夷狄而行
夷狄素患難而行患難とのみこゝろ
○問或人問こゝろ仁とこゝろ徒上下の者こゝろ連て来ず
反こゝろ下の者こゝろ乗論語こゝろ上下の者こゝろ
厚こゝろ也こゝろ邪に富こゝろ和こゝろ寡こゝろ

おのゝく自害せるを海見給ひて雖涙ぞうきの
上下の男一人怒りて男と子と又母妻と
に嘆きとゞけたるハ国も海びるふるばかり
山上下の声ハ物ゝ
いろ〳〵して可なりんや
言葉綴りて国山上哀れなる人ゝて憐れ
ぞうのあるべきを犯して又母妻を雖慢城
掛んとハ思ひもよらぬ眠とゝひ呼べし物
うをバ力に換ふして志も無れる又ゝ人の国

るの言葉ハ出を犯して都有
内ゝまゝ出へと辞いふまゝ出ばるゝ
老成して事と備へ経年者の名を取り力に
換ふ又一人の国るの云ゝ人の言ゝ猛れる強ども
未若垂ぞろ而ゝ出入して唯ゝの
中に拝く見と陶べし此ゝ潮ゝふを離
人ゝも思ゝいまゝ豊吾うべや又一人の国るゝ言
まゝ未若垂ぞゝ凡人情ゝ仕て事
とふし報とゝいざ過ゝるゝ喜怒哀

樂しうして皆あらかたり乾大学に倉使はるゝ所
あるとバ其一四の事とゆゑ新和すること所
に於て降りたるゆへんと其人情ハ多く
偏る侍ることあるを偏る侍ることハ是ず
事に害あるを大ひに偏るとバ大ひに害ある
侍るとバ外に害あるを大小ともに害ある事
絶ず繁じ一分の定四一分に関流して一定に流ら
ざるを病ん者一定ふ流るとバ痺ん
ん者大ひるとバ病とふし腫掛ゆとかはるべし

ゆへよ中庸に喜怒哀樂乃未發を中と云
て偏ることの侍ることの偏ることの侍ることハ是
すとゆへとも其に隔ずして義と顧て宜を
制することバ云る論よ中て害なきを云べく
大ひに益ありて治ることを齊へ治て下治
平らにとべしとあると道乃用ちり交互ひ起りて
天下の民を安じとゆへんとさわぐ凡人情凝
ることあるとバ何ふくも其に害ありとして
安事のに西く其よ治ることを制べし

さきばるの海可なりと云へども只我れ心陽や
ふ色形怒り濃きもの所如怒と休みもした
ひとりく共何とをく人うとの毎に出入すべきもの
是丈人の世に居や一生の間まい多く其人に附合ひ
乃ち道の流れを遇ぶこと変なきい事にしまい共
悟あるべきまく人うやし居那に意をくるの此始て
本来たる命うにはやして憤るいかさんよあらばや性
是に十信する逆境をみべし豊是のまをいく
心を学ん屋をんやまと人は都に順境に順で行ものを

此ものとおもひまをして自独に情を独に溺に成ゆく
ものなるを以人の逆境に意をくるを意とをいまく是
道心をとまるまく堅固にをべし独きばし且那いあ
仇まんいでるく我是如をべし心乃中まに伏和
く礼謝すべきまく豊あへく是と思んや是人
是をくいを別に程と初るを結び誰ふくも多は
我程まいい接辞に是をやうにひおもう世ふ是
と已憶とを一まを人もまを夫の世形まいい吾やに
待へう是にまりていよく成ん者とをひとみ

所々なる山村人我真の恵打といへどもあいろく
うれを恨む碩学ハ様々と機あるいはれて悔と
さえも食とも食といへども慢るべきてうてう又
我恵打と見ぜこそひく我と鄙ともあ過ま
恨ず彼人の同ごの時ゆへ今もハ我何ぞ恨ん
怨んやまさ一人の同るべ海云恵恨せり我又此と
すべき一所ゆ侮なげ聖人仏のこころへハ我
いまぞ所ざるる所を但聖人の心ハ
なもハ恨怨に集と怨怨に集もざ恨ふ

仏者ハ同胞なるゆん常に同胞ゆきハ胸中天性
渾然として自然の仁を生じて天地のこころ
なりさきハ我者を利生に切ぐれて
為くかもと滑度をんと撰恵人ゆ人
なるん共心を恨ずして我見ると恨で
恨をあるハ恵者乃道に入ることなり我ひと
紀ぐハ是者ハ聖人のこころ合ることなり人
といへ恵人の海いづまを一理ゆ中り
恨ぐ第四人同の海云紀ゆ恨ぐとこ四者ゆ

人間共論ハ動くるし動れ是絶まどの長
凡史の遠に動るまぐさ所形を惟ようさの
半田人間此論と宗りく失わずんば大ひなる
過ちなくして遂るべ半人間の所ふを動る
亀一

道の研究之中

○問仁共意味何ぬ
答仁ハ體用あり仁乃體を天理渾然と云ふ
天理渾然と共天理のまるゝせといふ事なり
天理共まるゝせとんかしを思業分れのるさ
處形を心業分れのるさ然ハ意形を心の
無を乃處天理のまるゝ勢なり思業分れ
乃ある限をるる私なを共共私なるさ

ゆへよ天理渾然たるつゝまる処なれ太極なれよ
太極の圖に曰相と雖けり為れい無極而太極の
體なりしは太極即ち是仁の體なりさ極ば天
理渾然たるゆへ人欲なし人欲なしゆへ人
心常に明鏡の如くにして
物ものゝ情てきせつ地位を得るゆへん
事に意じて藏る所なる惻怛
乃念のこなり更よ利欲人我彼此の

かしゆへよ父よ愛して孝となり兄よ愛して
悌となり君に愛して忠となり友に愛して信
となる皆一箇の惻怛の心の変化する所
の代なるべ愛する程の意一く惻怛なれ
あるざれ事かしゆへ惻怛の事に仁乃
用なるもちまバ仁の體よこうるふく無窮なる
とゝ紀い二六時中仁よ中庸
書く意惻怛の事にいくぐるゆ此よ
ゆゑく體用一致ふして更に二ツゆ故に中庸に

仁の體成未發の中とひ仁の用と已發の
中とひとえ本體は本なり用は末なり是は
時に未だのづから行る物ゆへ脩行人はひたすら
仁の體をんと用色べし仁の體成知と悟と
ひ仁の體と持ひ養とひ書ひ始て體用
一致に成る成脩行成就の人ぞ ふこれむ
仁の用ばかりと知るく體とたゞ思ふ者の
人なら未だ體と知ざ教人も自ら用ふ
うるゝ人もあれども其智愚ゆへ自ら

貴と打捨と過ちの多し是と佛教の有
為此功業といへども教色玄術の人
小技を以て泥の為ひうるべし但し先ゆふ知
無為無拘なるとは二六時中仏ゆふ知とる物
分に約ゆ處為則恒の事に拘ふ事かし
とひとすて無為なるものゞ仏と知ゆ命と新ゆ
人もひるべし是ぞ命乃味ひとたゞぬ人邪者
無為に成ると知ふ自然に約まる
ずしと滞る事なく親ゆ仕へ君とひうゆ世百姓勤

家業と治ふ彼くもそこも聽るゆふ〜えれば
乃ち〜紛ぎ〜あるに人い唯ひさすら生を主にたり
たまふ爲〜れのづ〜を修ひと得べき所を
○問義は意味何ぞ
答義乃體い即ち仁の體なり天理渾然たる
處ひを去て理乃まるゝ世あくおを人欲名利
の情よりさも爲る事ひさ時ハ心れ殺する
事つく皆天理のまゝにて人と濟ひと濟乃
ふ事ひ義なり但し心天理ち殺ひる處

人と濟ひと濟ひと濟れとそくい是と仁の用と
ひと人と濟ひと濟ひと濟處程度と計ひ大小緩
急ぐ宜きさにかゝふれと濟れとくハ是と義とふこ
ひ小程度大小緩急も又ハ乗生ひよあ淡
き心天理のまゝ為る時ハ自ら宜きさにうふなり去
天理乃事ハ先ず仁の道に洋ひ是ハ今毎ひ
濟る事と用ひて乗文云義の注小心之制
事之宜とハ是ハ制とハ乃制度ハ
事ひ是事ひ宜きさとハ美事のふれよ

事なりんの利勢とハ恒を大小絶対する事
なり聖人ハ君と弱ハ臣なる義を絶ずして弁慶安
宅の実あり判官殿と新しハ君と称する乃ん
ち恒重大小自然に判勢して冥たるハ君
勢を如何ともせんと雖ども君絶対いまを礼小ハ君乃
命を敷ハ臣仁大なり是とんく思案の海ざれ
ども自然よりと捨大絶形ハ君と猶ハ兄を
ちゝう是義なりまゝ人ハ新とハ不義
勢を絶ハ辞慶傷ハ勧進帳と読しハ

又ハ恒重と謂りて冥にうるハなり此命を
勢とハ傷ハ勧進帳を不義恒
是に関ハ君乃命とすハ義重し是とん
万事ハ推して知べしハ此ハ人の勢要ハ
信心と云依云任すべし云依云任すべ
勢とハ義なる庸たの法ハ仁義ハ叶ハ
心云依云任即ち中庸不偏不倚乃義なり心
不偏不倚即ち未発の中未発乃中に
叶ハ紀なる敬ハ取詰節に中る是已発の中

なり未發の中ハ仁義の體なり已發の中ハ
仁義の用なり平常仁と義との別ハ慈悲と
判斷とのごとし孔孟ハ仁義を實ハ一理
にて程子も曾て仁といへば義禮智と兼ねて
の名へなさてなく體と為ぐ知ざる人ハ凡百の
と紛ふ事なかしかくも人よ意あり我ハ害なき
為にすること事の宜きにて義なりと知て為る
色と行色し美き中に甘しかくも人我幸り利
益者のなかぐ変して不義と知べき事なる

世人ハ義と張りて事乃宜きハ信ずと知ば
我よ一箇乃義とつかの設て色とぬくと
者と人ハ善へなる人あり色ハ事も
あるとも又大ひなる害にて強ハ使者などい
我義と為ると義と為るハ他で
部紙為るなりさく義乃為やうハ人ハ歌第
して引ととべ孫病といわぞ又ハ分意と
若して全根よ切故をあると義を思ひ分
意ものさ知偶まべきあるう乃義にるふる

こゝ迄どと達色〻く害ある事まさ多し且人
我の心如く我慢増長してあらゆるひとたのを
用法と事〻〻逆ふ方を亡し家を破る父母
妻子に嘆と怨るに如る事ふ義いづれも是ちまた
しめうん又武士の人よ射て引とゝゞ命と惜
まず小〻ふくも人〻う恥辱とゝゞめを義と云へる
是も世〻に用ゆく若事もあまどゝも言又まあ
或いおしの礼と皆又い損細の事といひつのり
逆ふまい互に事果し又い切復などし父母妻子後

昔あれ名と勢絶し結と主人の為ゝいかゞゝ
も豈なく及ゝあゝ武士と数して主人の後と
なりても是と不義と云ゝ況自分も義なりと云ひ
他ちと義と云ゝ是と日本武士の風と云ゝ是
慈仁礼乃以ちゝ東世〻合戦絶ず武勇を尚ん
風俗ちゝ見ゝゝゝと日本人事
別法多事除ほよ傷ゝたる形ち起れる風と
ひなゝ是勇気の豊よあゝ是是勇士癖
撃なりと知べし我形ゝ武士なる人ハ勇

主人のものをば常に大切に設をし主人の御用は
主事と家とをとく成べく私の富をと夢にも
奏怯私闘勇公戰と云ぬく私の事ひまを怪病う
して御上ぶん御用ふいうを雷決するん事成
敵を又常小憎恐つくるの靖謀相ぬが事と思しく
廉頗と避しばとく唯私の者と捨て一命成
主人のあるを捨ん事とぶんぶ事なりと思へ
和よ必つる武士の風いん人我の私しり知るぶ成害者
く無おし後よ必つるぶん義しり出るゆへ有無

行事とく害明大義ハ即ち仁義なりと知べ
又町家なぶ小を偏審に正直なる人又ハ酒色の
傷害明ど事乃筋乃を主めくと義とんぶなる
人をし人もまく事にしく仁義小て者なを
あまとも又大ひよ害あ成事あ成ばハ理と相て
引負をわぶつい深事とも筋と主色くるの成
紀しむつくなりて大き小害をなす事あり
又加成の人ハ常に人乃私と者るん止ず須細ぶん
事なも小云をいふゆへ人附合無表町内又を

一族の中小くも分派の人あまたバ大よ持あまた
るもなりけるもばあ同乃不和合も生ずるし義
ハ吾とおのふ乃人乃性と相合ふ事
を起すもの美しくあくも人と生るゝ心あるバこと
不仁なりふ仁乃もばふ義なり義なりて仁り
原ざるもバ以義とすべうぎざれバ先ふ也いふぶぬく
ハ義へる義ハ皆義よあるぎ故よ豈すくるふ
して害多し唯仁より自然よいづる義ハ其の義
なるゆへう豈ひるく害ふしうくゝ心得

ざる事明也
○問礼ハ義味いん
答礼の體をやうり天理洋然として安安為
なるもなを即ち義の體と同一なり故安安為
為乃心より自然よ慈愛の心出るハ仁なるもの乃
慈愛事乃宜きに叶うるハ義乃なるもハ事よ
前ハ言小洋なるも扨仁義の心人よ交るを礼
きるさに更とハ自然よあるを敬ハ義よ交るハ自然
に礼と情と交る不善畢親疎よ付て各こゝ所に

意じく是に交る物さたるときバ我人面すりうゐて
仁乃森念もこゝ程くにたゞ況こゝ宜こゝふけふ所なよ
こゝ交るこゝ絡ゆ人皆和合と好く怒り驚ふ
事ゆ是礼ゆ和なりゆ人よ分も情こゝ敬と称
國王下も卒ふ知るこゝ是一つの天理渾
然の體ゆ人を玲瓏ゆ仁と名付極至大
小宜こに叶ふ知ゆ義と名付事ゆ規矩よ交
く吾こゝ知よ意じて和合とうす處ゆ礼と名
付ゆ是ゆ未文ゆ礼の程小天理之節文人事之

義則ゆ人ゆ至理乃節文と名付天理渾然
ゆ人ゆ物小意じて是程よ合こゝ
取巴ゆあるとゆ人事之義則と人人
傷よ交る擬作法とゆふ云ゆ法ゆ学者
ひこゝ乃ゆ人を云ゆ私云為に為すべこゝ
云ゆ私云為よ人ゆこゝバ仁義礼ゆ乃ゆ中
小徒ゆ佐古乃ゆ者ゆ成ゆ
人ゆ名ゆ言ゆ未云ゆ私云為よ成ゆ
人ゆ名ゆこゝ礼ゆ儀ゆ

と知るべし。後こゝの方に成うるぬべしと雖も
人と敬ひ己れと卑め吾事とび人を譲ること
事とゝ為に引き文る所にする事明らかなる
礼い人我慢心を捨てゝ謙になる事なりと
知るべしされど作業はゝとひ礼を修むるもの
も少からずもこれを軽んじ慢る者あるべ
礼まい妻子ちとまるべし必ず我を敬はゝ人を
譲り敬へば自ら人を和合ゝ祝ふ事
夫婦老た朋友の間ゝまるまで

和せざる事かし。凡氣色の礼ハ皆人我と事
うゝ記れらとく一表の間ふくも拙ひ乃ちるれ
ゝるまふ人我をゝるふゝまり人ゝれなんべ仁の
拙ひあゝんや友を侮ゝ小能以礼譲為國乎何
有不能以礼譲為國如礼何とのゝ人をされば譲とまと
し人乃和合をなすもゝふまと知るべしゝ礼ばゝく
ち言合色ゝあゝず巧ゝ人合迎ハさまふ利と合る
人涼くして人を侮ひ事ふるかを礼ハこの人我慢
心と捨ゝく仁を優ゝものふを侮ふ世ゝハ世間況

漢土儀式を法万物用るにしてる細しきと礼
しんぬて自らも若く人をもひを無く人り
居ずして厳敬に動る者あるを大ひなる過に成ずや
又有職故実などハ古き格式と礼とんぬる人
ひら見ハ礼の素を知りて本にまセざるを掛儀と
なりて人ハ古実と為ハ直しけるとも誤れて下
と治る小ハ古実と知るるかりてハ豈に当ぬ事と
なるべしたまバ海借小も礼云礼云玉帛之謂哉とのた
つる絶しんぬべき事なり